2003年『古本説話集』現代語訳

次の文章は、北国の山寺に一人籠(こ)もって修行する法師が、雪に閉じこめられ、飢えに苦しんで観音菩薩に救いを求めている場面から始まっている。

「などか助け給はざらん。高き位を求め、重き宝を求めばこそあらめ、ただ今日食べて、命生くばかりの物を求めて賜べ」と申すほどに、乾(いぬゐ)の隅の荒(あば)れたるに、狼(おほかみ)に追はれたる鹿入り来て、倒れて死ぬ。ここにこの法師、「ア観音の賜びたるなんめり」と、

「どうして助けて下さらないのだろう。
（私が）高い地位を求めて、
貴重な宝を
求めているならば、（助けて下さらないことも）あるだろうけれども、（そうではない。）ほんの今日食べて命を永らえるほどの食べ物を探し求めてお与えください。」と申し上げる頃合いに、
北西の隅の
荒れている所に、
狼に追われた鹿が入って来て、
倒れて
死ぬ。
この状況に対して、この法師は
「観音様がお与えになった物である
ようだ」と思って、

「食ひやせまし」と思へども、「年ごろ仏を頼みて
「食おうかしら」と思うけれども、「長年、仏を頼りにして

行ふこと、やうやう年積もりにたり。いかでかこれ
仏道修行を行うこと、次第に年数も重ねてきた。どうしてこの鹿を

をにはかに食はん。聞けば、生き物みな前の世の
今さら急に食べようか。いや、食べない。聞くところによると、生き物はすべて前世の（自分の）父母（が

父母なり。われ物欲しといひながら、親の肉を屠り
転生した姿）である（可能性がある）。私は食べ物が欲しいと言うけれども、どうして親の肉を切り裂いて

て食らはん。物の肉を食ふ人は、仏の種を絶ちて、
食べようか、いや、食べない。生き物の肉を食べる人は、（仏の教えに背くので）成仏する可能性を絶っ

地獄に入る道なり。よろづの鳥獣も、見ては逃げ
て、地獄に入る道（を歩む人）である。あらゆる鳥獣も、（そんな人を）見ては逃げ走り、

走り、怖ぢ騒ぐ。菩薩も遠ざかり給ふべし」と思へど
怖がって騒ぐ。菩薩も見捨てなさるにちがいない。」と思うけれども

も、

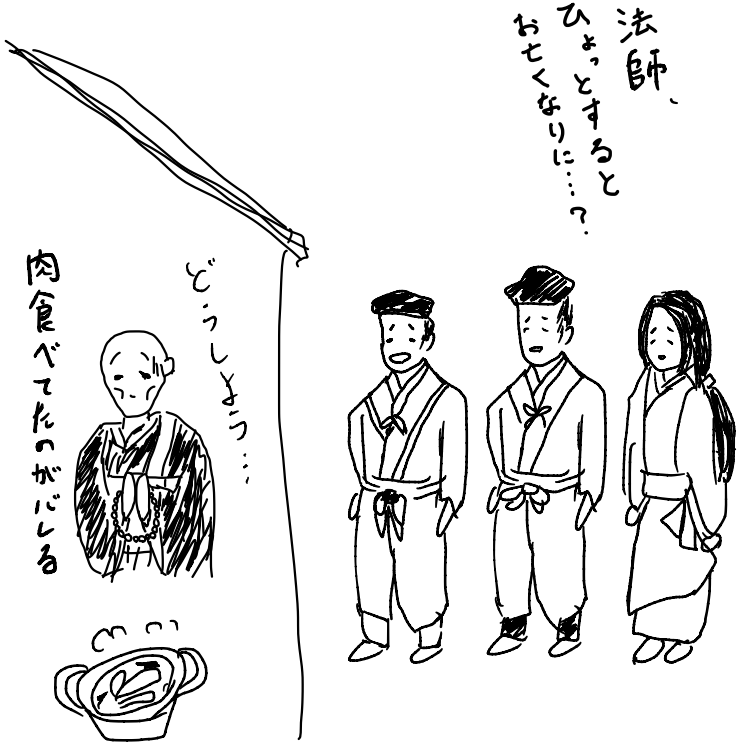
この世の人の悲しきことは、後の罪もおぼえず、
この世に生きる人間の悲しいこと（＝さが）は、（仏法の戒めを破って）来世に受ける罰のことも思いつか

ただ今生きたるほどの堪へがたさに堪へかねて、刀
ず、ただ今生きている間の堪えきれない（空腹の）苦しみに耐えかねて、刀を

を抜きて、左右の股の肉を切り取りて、鍋に入れて
抜いて、（鹿の）左右のももの肉を切り取って、鍋に入れて

煮食ひつ。その味はひの甘きこと限りなし。
煮て食ってしまった。その味わいの美味しいこと、この上ない。

さて、物の欲しさも失せぬ。力も付きて人心地
さて、食べ物が欲しい気持ちもなくなった。力も湧いてきて、正気に返った。
おぼゆ。「ウあさましきわざをもしつるかな」と思ひ
「驚き呆れる（仏の教えに背く肉食という）行動をも、してしまったなあ」と思って、
て、泣く泣くゐたるほどに、人々あまた来る音す。
泣きながら座っているときに、人々がたくさん来る音がする。
聞けば、「この寺に籠もりたりし聖はいかになり
聞くと、「この寺に籠っていた僧は、どのようになって
給ひにけん。人通ひたる跡もなし。エ参り物もあら
しまいなさったのだろう。人が通っていた跡も無い。召しあがる物もないだろう。
じ。人気なきは、もし死に給ひにけるか」と、口々
ひとけが無いのは、ひょっとするとお亡くなりになったのだろうか」と口々に
に言ふ音す。「この肉を食ひたる跡をいかでひき
言う声がする。（僧は）「この肉を食べてしまった形跡を、どうにかして
隠さん」など思へど、すべき方なし。「まだ食ひ
隠そう」などと思うけれども、どうしようもない。「まだ食べ
残して鍋にあるも見苦し」など思ふほどに、人々
残して鍋に（鹿の肉が）有るのもみっともない。」などと思っている時に、人々が
入り来ぬ。
入って来てしまった。



「オいかにしてか日ごろおはしつる」など、廻(めぐ)りを
「どのようにしてこの数日間、過ごしていらっしゃったのか。」　など（と言って）周辺を

見れば、鍋に檜(ひのき)の切れを入れて煮食ひたり。「これ
見ると、　鍋に檜の切れ端を入れて　煮て食べてあった。　「これは、

は、食ひ物なしといひながら、木をいかなる人か
食べるものが無いとはいっても、　木をどんな人が

食ふ」と言ひて、いみじくあはれがるに、人々仏(注)を
食べるのか」と言って、　たいそう同情したところ、　人々が観音菩薩像を

見奉れば、左右の股を新しく彫(ゑ)り取りたり。「これ
拝見すると、　左右のももを新しく彫り削ってある。　「これは、

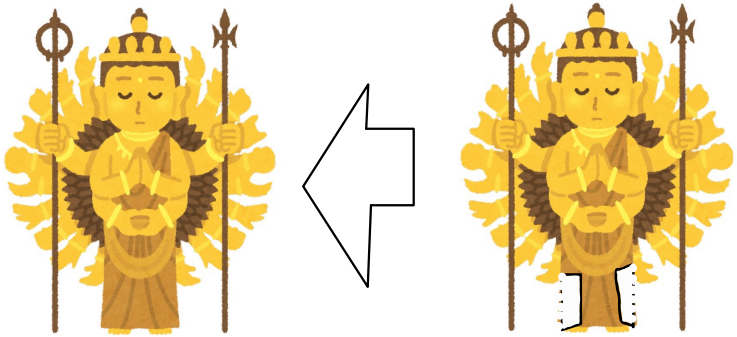
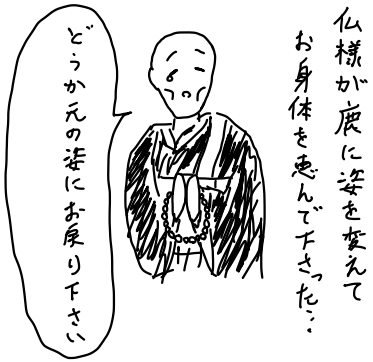
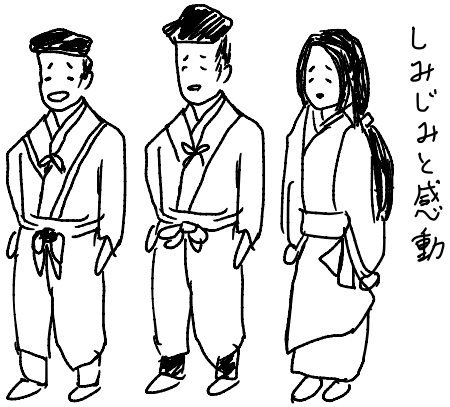
は、この聖の食ひたるなり」とて、「いとカあさまし
この法師が食っているのだ」　と言って、　「とても　驚き呆れる

きわざし給へる聖かな。同じ木を切り食ふものなら
行動をしなさった法師だなあ。　（どうせ）同じく木材を切って食べるの

ば、キ柱をも割り食ひてんものを。など仏を損(そこ)なひ
ならば、　柱でも削って食べてしまえばよいのになあ。　どうして仏像を損傷し

給ひけん」と言ふ。驚きて、この聖見奉れば、人々
なさったのだろうか。」と言う。　驚いて、　この法師が（観音菩薩像を）拝見すると、人々

言ふがごとし。
が言った通り（に削れていた）。

「クさは、ありつる鹿は仏の験じ給へるにこそありけれ」と思ひて、ありつるやうを人々に語れば、あはれがり悲しみあひたりけるほどに、法師、泣く泣く仏の御前に参りて申す。「もし仏のし給へることならば、もとの様にならせ給ひね」と返す返す申しければ、人々見る前に、もとの様になり満ちにけり。

「それならば、先ほどの鹿は、仏が（姿を変えて）霊験を現わしてくださったのだなあ。」と思って、先ほどの事情を人々に語ると、（人々が）感心して愛しみ合っていたときに、法師は泣きながら仏像の御前に参上して申し上げる。「もし（先ほどの鹿が）仏がなさったことならば、どうか元の姿におなり下さい」と何度も申し上げたところ、人々が見ている前で、元の姿（の仏像）に完全に戻ってしまいました。